

〈図書紹介〉

アーノルド・ミッチェルほか著／吉福伸逸監訳
『パラダイム・シフト』

——価値とライフスタイルの変動期を
捉えるVALS類型論——』

中野千秋

一、価値とライフスタイルの類型論

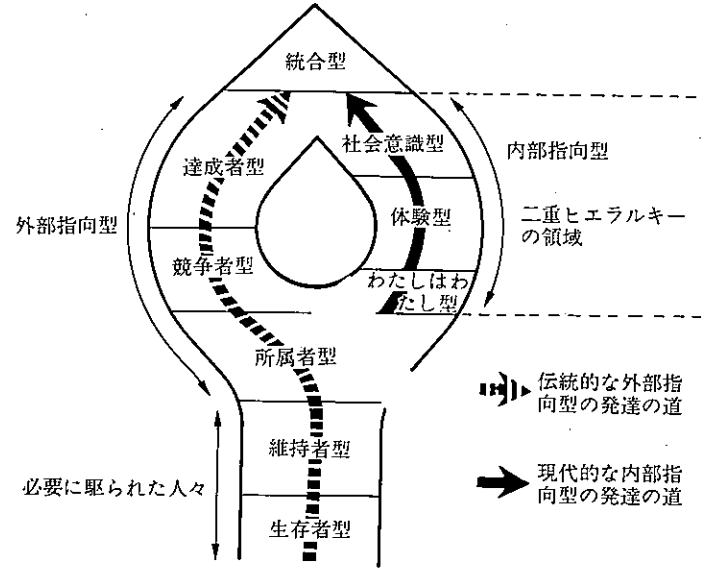
現代は文明の一大転換期（ターニング・ポイント）にさしかかっている。工業社会から脱工業社会へ、産業社会から情報社会へなど、新たな文明の到来が告げられて久しい。また、「物から心へ」などともいわれているが、その「心」の内容は何なのか、一向にはっきりしない。いま、既存の内容の方では到底理解できないような様々な現象が現れつつある。人はそれを、「価値観の変化」とか「価値の多様化」という言葉で表現する。しかしこれまで、人々の価値観の変化について、いま一步踏み込んで議論することは少なかつた。この問題に、真っ向から取り組んだのが本書である。

本書は、米国二十九の企業がスポンサーとなって、一九七八年からカリフォルニアのスタンフォード研究所（SR I インターナショナル）で開始された「価値とライフスタイルの調査」（VALS: Value and Life style）に基づいている。この調査の目的は、アメリカ人の価値観やライフスタイルの選択が消費パターンに与える影響を探り、社会的価値の動向とか価値観の変化がビジネスや政治に対して、もつ意味を考えようとするものである。したがって本書は、最新のアメリカ社会に関する書であり、しかも、しっかりとした実証的根拠をもった報告書である。

この調査研究の過程で、ひとつの社会心理学的類型論（VALS 類型論）が生み出された。これは、人々に動機づけを与えライフスタイルの選択を左右する価値のヒエラルキを解明した新たな人間論でもある。このVALS 類型論は、人間性心理学とトランスパーソナル心理学の創設者として知られるA・マズローの「欲求階層説」を骨格としているが、かなりの修正が施された。

VALS 類型論は、計九種類のライフスタイルによって構成されている。最初の三つのスタイルは、「生存者型」、「維持者型」、「所屬者型」で、マズローの生理的欲求、安全欲

図表 I VALS類型の二重ヒエラルキー



○出典：『パラダイム・シフト』113頁より。

求、所属欲求にほぼ対応する。ところが、VALS類型論の大きな特徴は、その後の展開を複線型の二重ヒエラルキー構造にしている点にある。つまり、「所属者型」の段階を過ぎると、人は次に、外部指向（「競争型」「達成型」）か、内部指向（「わたしはわたし型」「体験型」「社会意識型」）かのどちらかの道を歩み始めるといっているのである。そして、この二股のVALS類型の階段を経たのち、再び出会って「統合型」に達する（図表I）。以下、このVALSの諸類型の特徴を概観することにしよう。

二、VALS諸類型の特徴

(1) 必要に駆られた人々のカテゴリー

物質（財源）が非常に限られていて、生活が厳しく、必要に駆られた人生を送る（選択の余地がない）人々。したがって彼らにとっては、生存することそのものや安全などが、何ものにもまさる価値となる。これには次の二段階のライフスタイルがある。

① 生存者型……最も生活水準が低く、極貧にあえぎ、絶望のうちに暮らす。

② 維持者型……やつとこのことで生活を維持しているが、

で自信にあふれ、勤勉かつ物質主義的で、名声と成功を指向し、体制内での自分の地位に満足しているが、えてして安楽享受的になる傾向がある。

(3) 内部指向カテゴリー

外的な事柄よりも、内的な欲求に重きをおく新たな型のライフスタイルである。これらの人たちは、個人に固有の欲求や願望——内的価値——に従って自分の人生を形づくろうとする。

⑥ わたしはわたし型……内部指向型の最も初期の短い間に現れるライフスタイル。若者に多く、自己陶酔的かつ猛烈に個人主義で、自分自身が不可解な感情にさいなまれて混乱しており、その行動は、劇的、衝動的で、気まぐれである。

⑦ 体験型……心理的に成熟して、強烈な自己中心主義から焦点が拡大し、他人や社会的、人間的問題を包含するようになった段階。自ら直接的な体験をすることを望み、エキゾチックなもの（東洋の宗教など）、不可思議なもの（超心理学など）、自然なもの（有機農業やホームベークィングなど）に魅きつけられる。最も情熱的に他人とつきあう人たちで、芸術、人間関係、世界問

自分たちを抑圧している体制に対する怒りや不信をもっている。

(2) 外部指向カテゴリー

「他人がどのように考えていると思うか」によって態度を決める人々。二十世紀に入り、第二次大戦をへて、経済的発展の担い手となり、今日の豊かな社会をつくり出した。このタイプのライフスタイルには、以下の三つの段階がある。

③ 所属者型……ある程度自分の生活の目途がたつと、人は何らかの組織や集団に所属したがる。彼らは、家族、企業、教会など、形は何であれ、自分の所属する集団の道徳や規則を遵守し、周囲の環境とうまく調和することによって安心を得る。

④ 競争者型……その中から、人に先んじて成功しようと努力する「競争者型」が生まれる。彼らは、野心的で地位を意識し、男性的で競争心が強い。他者に対する不自信は強く、金と権力へのいやしがたい乾きをもっている。

⑤ 達成者型……ビジネス界、各種の専門的職業、政府の指導者など、社会的成功を収めた人々。彼らは、有能

題などに関心を伸ばすが、自分の考えに夢中になり、きわめて享樂的で、快樂主義に陥りがちである。

⑧社会意識型……内部指向性が、自他を超えて社会全体へ、あるいは地球や宇宙にまで広がった状態。彼らは、深い社会的責任感から、資源保護、環境保護、消費者保護などの活動を行ったり、あるいは簡素な生活や自然に魅かれる者も多い。世界の問題に強い関心を示すと同時に、自分自身の内的成長に深くかかわっており、成功し、裕福で、自信があり、有力な地位にいる。

(4)内外双方指向カテゴリ

内部指向カテゴリの初期の段階では、一般に主流とは別であろうとする差異化欲求が強いが、心理的に成熟し真の内的動機が浮上してくると、他人の見解や異質な考え方に良い点を見いだす寛容さが出てくる。また外部指向カテゴリにおいても、達成者型は年月を経るとともに、次第に内部指向型人間の考え方に理解と評価を示すようになる。こうして、内外二つの道が再び出会う段階に達する。

⑨統合型……総てを統合し、外部指向の力と内部指向の感受性を融合したライフスタイル。彼らは、心理的な意味で完全に成熟しており、一つの問題を多面的に見

ることができる。物事に対して深い調和感を抱いており、自信があつて、自己実現的で、しかも世界的視野をもっている。深く感得された幅広い経験から生じる冷静沈着さがあり、しかも力強く、均衡のとれた平和がある。

三、心の動向と時代背景

VALSの複線型とエラルキーは、類型論であると同時に発達段階論的な枠組みでもある。しかも、その段階が時代の変化とともに現れていると見るところに、この理論の意味がある。

まず、VALSの諸類型は、未熟から完全な成熟へと向かう個人の心理的発達過程の諸段階となる。あるいは、人間の潜在的可能性の部分的実現から完全な実現へと向かう過程といつてもよい。動揺から静寂へ、そしてまた動揺へという成長のリズムを示しながら、人は段階を登っていく。そして変化のたびに視野が広くなり、価値群が複雑になり、人格構造は豊かになっていく。個人の場合、複線型とエラルキーの中で、内部指向、外部指向のいずれか一つの道を選び、それを極端に追求していくことになる。

社会の発達過程の場合には、その中のメンバーがそれぞれ自分の道を選ぶため、いずれの道にある者が主流をしめるか、どの型のライフスタイルをとる人間の影響力が大きくなるかによって、社会の様相は異なってくる。そして、一九七〇年代に顕著に出現しはじめたアメリカ社会の変化は、内部指向型ライフスタイルの人間が次第に増加することによって、従来の伝統的な外部指向型の価値観が大きく揺らぎつつある現れだといつのである。

今世紀はじめの数十年前、アメリカ社会においては、「生活水準」という物差しが共有されていた。一九三〇年代の大恐慌の苦難に直面したとき、生きのびて、生計を維持し、順応することが支配的な価値観であった。そして第二次世界大戦に際し、人々は戦争に勝つという共通の目的に対して、一致団結してスクラムを組まなければならなかった。勇ましい心を養い、勤勉に努力し奉仕し、良き家庭生活を守る事が共通の価値となった。こうして、大恐慌から第二次世界大戦へと至る中で、アメリカ社会は、「生存型」から「所属者型」への道をたどったのである。

一九四〇年代から一九七〇年代半ばまでは、成長と多様化の時代であった。生活水準をただ上げるだけの時代は過

ぎ去り、多様なライフスタイルに枝分かれする時代になった。とりわけ一九五〇年代と六〇年代の経済的繁栄は、人々の心を生計維持の制約から解放し、「競争者型」、「達成者型」、「わたしはわたし型」、「体験型」、「社会意識型」という多様な価値観へと向かわせたのである。

その若い時代を「必要に駆られた人々」ないしは「所属者型」の家庭で育ってきた人たちは、成功への衝動が特に大きい。彼らは、貧困に対する不安と成功に対する期待の両方に動機づけられ、物質的豊かさ、権力、承認、華美な生活を求めて、勤勉に努力し続ける。そして、競争に打ち勝った者たちは、政治やビジネスの世界のリーダーとなる。彼らこそ、今日の豊かな社会を実現した、時代の主役であった。

しかし、同じこの時代に、新たな価値観をもつ世代が生まれはじめた。一九四六年から一九六四年に生まれた、いわゆるベビーブーム世代は、かつてないほど豊かな時代に生まれ、ほとんど貧困を知らない世代である。彼らは、豊かな家庭をもち、すでに物質的には満たされており、もはや生きるために競争する必要もなく、同時に自由であったところが、人間はそれではすまなくなる。彼らは、親た

ちの外部指向的価値を拒否し、反発することによって、力と承認への欲求を満たそうとした。さらに、成熟の度を深め、政治や世界問題への関心を伸ばし、あるいは自己の内面へのかかわりの度を深めていった。一九六〇年代の学園紛争、ベトナム反戦運動、ニューレフト、ヒッピーなど、物議をかもしだした世代がそれである。

時あたかも、この頃のアメリカ社会は、時代の大きな曲がり角を迎えていた。ベトナム戦争における敗北は、アメリカ社会において最も普遍的な価値を持っていた民主主義の、初めての挫折を意味していた。また、ニクソン・ショックによる固定為替相場制の崩壊は、自由主義経済の行きづまりの前兆であった。

青年時代を理想に燃えて過ごしたベビーブーム世代の挫折は、だれの目にも明らかであった。しかし、彼らは決して諦めきつたわけではない。その理想主義は、形を変えて自己を表現しはじめた。それは、次のように、いろいろな方面に現れている。

①ニューサイエンス……物質主義的、合理主義的、要素還元主義的で、断片化された近代西欧科学の在り方を克服し、物質と精神の統合、有機的全体の新たな科学を構築し、物質と精神の統合、有機的全体の新たな科学を構築

築しようとする運動が出現し、人類の科学観を根底から変革しようとしている。

②ホリスティック・ヘルス運動……部分の寄せ集めの身体観を否定し、あくまで全体的なものとしての人間存在を訴え、様々な角度から人間の健康を考えようとする。特定の専門医に治療をまかせておくのではなく、患者自身の積極的役割も強調する。

③トランス・パーソナル運動……個人を単位とする心理学にとどまらず、個人、他者、国籍、民族、文化の境界を超えて、人間は最も根本的な基底では、すべてにつながりあうものを持っているとの認識にたつた心理学。人間の潜在的可能性を引き出すさまざまな手法が新たに開発されている。

④エコロジー運動……環境破壊や資源枯渇の危機に見られるような自然を征服する人類の行きかたに警告を発し、生態系と調和した生産、消費、生活体系を目指す運動。政治的、社会的な意味をこめて様々な形の環境保護運動が展開されている。

⑤フェミニズム運動……いわゆる男女平等運動、女性解放運動。女性の社会進出を著しく促進し、職場生活や家庭

生活のスタイルを大きく変容させた。

一九七〇年代、アメリカで始まったこうした変化の中心的担い手となったのは、「内部指向」の新しい価値観、新しいライフスタイルを求めるベビーブーム世代だといわれている。

四、パラダイム・シフト

それでは、今後アメリカ社会はどのような変化の道筋をたどるのであるのか。VALSの重要な使命は、未来に目

を向け、将来の価値とライフスタイルのあり方を予測することにある。本書は、決して予言者めいた大胆な推測をするのではなく、VALSの諸類型ごとの人口動態や、経済的あるいは社会的潮流に関する調査データに基づきながら、いくつかの代替可能なシナリオを描いている。

中でも、七〇年代になって顕著に現れはじめた「内部指向型」ライフスタイルが、従来の伝統的な「外部指向型」と対照的な一大勢力となりつつある傾向の延長線を、「最も有力な未来」に位置づけている。そこには、この二つの道

図表2 統合型社会における価値の傾向

<ul style="list-style-type: none"> ・同質や複数主義から場のなかの場へ ・量から質へ ・硬直から適応へ ・豊かさから充足へ ・システムないし自己指向から社会指向へ ・消費倫理からエコロジー倫理へ ・画一性から多様性へ ・ヒエラルキーからテラルキーへ ・独立、自立から相互依存へ ・物からプロセスへ ・伝統的から体験的へ 	<ul style="list-style-type: none"> ・模倣から本格へ ・総意の高低から決定的な問題に関する総意へ ・テクノクラートの、個人的倫理から人間主義的倫理へ ・自由放任もしくは自制からフィードバックによる制御へ ・量的/質的目標から量的/質的トレード・オフへ ・人間の自然支配ないし自然の人間支配から自然のなかの人間へ ・印象的から有意義へ
---	--

○出典：『パラダイム・シフト』329頁より。

